

「紹介 私の研究」

(担当外国語、専門分野)

石田 智恵	スペイン語、ラテンアメリカ研究・文化人類学
岩村健二郎	スペイン語、キューバ歴史学・思想文化論
江口 大輔	ドイツ語、18世紀ドイツ語圏文学
大森 信徳	中国語、中国古典文学・中国古代芸術論（書論）
岡山 具隆	ドイツ語、ドイツ現代文学
乙黒 亮	英語、形態論・統語論・言語類型論・認知科学
澤田 敬司	英語、ポストコロニアル演劇研究・演劇の実践研究
下田 啓	英語、日本近現代史
首藤佐智子	英語、語用論・社会言語学・法と言語
鈴木理恵子	英語、19世紀英文学
武黒麻紀子	英語、言語人類学
立花 英裕	フランス語、言語思想・フランス語圏文学
谷 昌親	フランス語、フランス現代文学・映像論
塚原 史	フランス語、芸術論・表象文化論・フランス現代思想
土谷 彰男	中国語、中国古典文学・唐代文学論
原田 康也	英語、認知科学・文法理論・計算言語学・外国語教育・第二言語学習・言語学習の情報化
星井 牧子	ドイツ語、外国語教育学・第二言語習得・ドイツ語教育研究
本山 哲人	英語、エリザベス朝演劇
守中 高明	フランス語、フランス現代思想・比較詩学
門田 康宏	中国語、中国近代文学・文体論
弓削 尚子	ドイツ語、西洋史・ジェンダー史
吉田 裕	フランス語、フランス文学・日本文学・近代絵画
ゲイ・ローリー	英語、日本文学・女性史

石 田 智 恵

私はいまアルゼンチンの研究をしています。きっかけをよく尋ねられますが、それは大学院での研究テーマが「日系人」だったことに関わります。

「日系人」という範疇には、国民 nation、人種 race、民族 ethnic group の分類が互いに連関する現実がよく現れています。日本とアルゼンチンで用いられる「日系人」という語を対象に、人間の線引き（同一化と他者化）の現実を歴史人類学の問いとして紐解いていくことが私にとって最初の研究課題でした。「日系アルゼンチン人」を通じてアルゼンチンという「移民の国」に出会ったわけですが、それはメキシコ留学で知ったつもりになっていた「ラテンアメリカ的」世界とは何かが違っていました。なかでも20世紀初頭に完成をみた奇妙な大都市ブエノスアイレスは、日本の山奥の寒村で生まれ育った私にとって圧倒的な「異文化」を感じさせる場所でした。その言葉にできないわからなさに強く惹かれたのが研究の始まりです。

始めてみると疑問は増えるばかりでしたが、わかったこともあります。たとえばアルゼンチンと日本とのナショナリズムの共通点。ラテンアメリカ／アジアの一部でありながらそれを拒否するような「文明」「西洋」性の強調、「単一人種／民族神話」を基盤とする国民観、それと表裏をなす「先住民」「外国人」の抑圧。両社会の「差別」の現れ方がどこか似ているのです。こうして、ずっと身近にあるけれど私自身が悩まされることのないまま漠然と気になっていた様々な差別・抑圧の存在が、アルゼンチン経由で（ずいぶん遠回りですが）明確な問いのかたちをとるようになりました。

現在は、アルゼンチン社会の政治的側面、特に市民の政治行動・運動に関心を持っています。文化人類学の根幹にかかわる主題でもある人間の線引きが、政治的暴力としてしばしば残虐に実践されてきたこの社会では、暴力的な線引きに抗する政治的实践も絶えず模索され強く実現されてきたのです。

岩 村 健二郎

高校生のころ、漠然とフィールドワークに興味がありました。今から考えると、当時の日本では一部で「ニュー・アカデミズム・ブーム」というのがあって、僕も栗本慎一郎とか岸田秀とか、面白がって読んでました。当時はみな面白がっていたのです。でも構造主義は高校生には難しくて、その先にあった脱構築とかポストモダンとかはよくわからない。それでも『悲しき熱帯』は題名も素敵だしそのまま文学として受け取って、大学生になってその気分のままキューバに行きました。するとキューバの文化に触れてとてつもなく面白い体験をたくさんできたので、これはもしかしたらレヴィ・ストロースがブラジルでやったみたいにフィールドワークとかしたら面白いんじゃないかと思いました。そこでとりあえずキューバ人がキューバの文化について書いた本を読んでみたら、「黒人」は「犯罪者」だって書いてありました。それが旧植民地のテキストということであり、自分が面白がっているのが旧植民地の文化であると「理解」できるまでずいぶんかかりました。一部は今でもわかっていません。それで、自分が面白いと思っていることと、フィールドワークをするということは全然違う行為なのだということにすぐに気がついて、前者を整序するのをやめたところ、後者は霧散していきました。気がつけばベッタリと文献学になっていて、今は20世紀の最初くらいのキューバの新聞記事を素材にして、植民地の人種言説の分析をしています。アーカイブのエレベーターが壊れていたり、お弁当が配達されないで職員が帰ってしまったりして大変です。文献のデジタル化を一人のカメラマンがやっていたりします。でも18世紀に作られて世界遺産になっているその（ボロボロの）建物の前で、取り留めのない話をキューバ人としてしていると、面白すぎて、いやというほど笑ったりしています。個人の体験は、普遍一般化するのを前提に得たりできないのだと思います。

江 口 大 輔

学部時代にジャン・パウル（1763-1825）という作家に出会って以来、今まで研究を続けています。読むのに大変難儀する作家ですが、度重なる脱線や突拍子もない比喩で読者を振り回しながらも話の道筋はきちんとつけていく、その語りの技量は並外れています。私の関心は、主にそうした彼の語りそれ自体、とりわけその比喩表現に向いており、これをテーマとしていくつかの論考を発表してきました。ですが、比喩を論じるための立脚点を見つけることができずに、修論や博論といった節目の機会では、比喩から離れて物語の筋や思想的なテーマに注目した作品論を執筆しました。しかし、いわば仕方なしに取り組んだ作品論で、作品中に目立たぬ形で（つまり、比喩や脱線の洪水に埋もれて）整然とした構成が存在していることを発見し、この作家の意外な一面を知ることになりました。

18世紀の後半は、自然の忠実な模倣を目指す詩作が支配的だった時代が終わり、人間そのものに文学の関心が移っていったころです。それゆえ文学は、同じく人間を論じる学問である哲学や美学との相互的な影響関係のうちにあり、この時代の文学を研究するうえでは、理性と感性、あるいは精神と身体など、「人間」に関わるトピックが当時どのように論じられていたかを知ることが求められます。この時期の言説には難解なものが多いのですが、少し先立つ18世紀前半の初期啓蒙文学および文学理論（自然模倣文学の時期）には、同世紀後半で議論される諸問題が萌芽的に、しかもわかりやすい形で表れています。それに気づいてから、18世紀という時代を考えるための展望が開けたように感じています。

比喩については、バックボーンとなる理論を探りながら、長い目で取り組んでいこうと思っています。言葉がいかに世界内の事物を指し示すのかという「指示」の観点で、私の関心に沿う研究には有効なのではないかという感触を持っています。

大 森 信 徳

私はこれまで、「書論」とよばれる書芸術について論じた古典籍、および書芸術と文人との関わりを主軸に据えて研究を行ってきました。

日本の小中学校で教育を受けたものなら、必ず一度は筆を持った経験があり、日常においても看板、印章、表札など様々な書が身近に存在しているように、今日なおも私たちは書と深く関わりを持ちながら暮らしています。

「書」は、書かれた内容、すなわち手紙あるいは詩といった文学的側面を持ちながら、同時にその書かれた文字が芸術的表現として鑑賞されるという特徴をもっています。さらに、六朝時代に「書」が芸術として公認されるに至って以来、文人の生活の一部を形成し、後世、「琴棋書画」の言葉に代表されるように、彼らの嗜みの一つとして重んじられてきました。それは個人の内面にある情感を豊かに表現できる恰好の手段であったことによるものかも知れません。

それゆえ、彼らがどのような美意識を持ち、どのような生活観を持っていたのか、その全体像を把握するうえで、書が十分に有効な切り口となり得、さらにその生活の周辺を考察することで、中国の芸術の本質を理解する手がかりとなりうるのではないかと考えています。また、書画と文学が相互に影響しあいながら発展してきたことから考えても、文学の領域のなかに書論を置いてみるのも、あながち無駄な試みではなく、逆に書論から文学へと新しく照射される部分も少なくないと思われます。

また、「書」は単なる一個人の自己表現にとどまらず、それをめぐる交友や評価といった、人と人をつなぐ社会的な役割の一端を担ってきた側面も軽視することはできません。さらにそこには、公的な場での鎧を脱ぎ去った、ありのままの「私」の姿が映し出されているといっても過言ではないでしょう。「書」の世界を訪ねることで、中国の知識人たちの美意識やメンタリティーの実像に少しでも迫りたいと願っています。

岡 山 具 隆

私の専門分野は、第二次世界大戦後のドイツ現代文学ですが、現在の専門にたどり着くまでには少し回り道をしてきました。

私は子供時代の比較的長い時間をドイツで過ごしましたが、当時はドイツが東西に分断され、冷戦の真っ只中でした。あの頃の政治的緊張は子供だったとはいえ、やはり覚えています。おそらくそうした経験も手伝って、大学生になるとドイツの戦後史に興味を持つようになりました。卒業論文では、ドイツの戦後史の中でも、東側世界との接近を図った西ドイツのヴィリー・ブラント首相の「東方外交」について論じました。その卒業論文に取り組んでいるときに、当時のブラントをギュンター・グラスやハインリヒ・ベルなどの作家たちが、選挙応援演説などを通して支援していたことを知りました。ここでようやく文学と出会うことになりました。当初は作家たちの政治活動そのものに関心がありましたが、次第にナチズムの過去という重い負の歴史に対して、文学がどのように向き合ってきたかということについて興味を持つようになりました。T.W. アドルノの「アウシュヴィッツの後で詩を書くことは野蛮である」という有名な言葉がありますが、文学の魅力、そして非常に難しいところは、何について語るかということもさることながら、それをどのように語るかということにあると思います。ナチズムの過去について語ることをめぐる作家の格闘の跡を文学作品の中で追っていく作業を通して、例えば現在の日本においても非常にアクチュアルなテーマで、深刻な政治的対立の原因ともなっている歴史認識の問題について考える上でさまざまな視点、ヒントを得ることができます。このように、日本との比較も意識しつつ現在は、小説『ブリキの太鼓』の作家として有名なギュンター・グラスの散文作品を中心に、ドイツにおける「想起の文化」を一つのキーワードに、文学と記憶の関係について研究をしています。

乙 黒 亮

私の専門は言語学の中でも、言語の構造を数理的、理論的に考察する理論言語学と呼ばれる分野です。1960年代に起こった認知革命以降、人の心のメカニズムの解明を目指し、言語学、心理学、情報科学を初めとする複数の学術領域が交差する「認知科学」という学際的な研究パラダイムが形成されてきましたが、私の研究もその大きな流れの中に位置付けることができます。

言語という表現形式を産み出し・理解することを可能にする人間の脳内に内在された知識・能力とはどのようなものなのか、という大きな問題設定に対し、私の研究は特定の言語の構造の詳細かつ緻密な理論的形式化および様々な言語の普遍性・多様性の観察と類型化を行っています。これまで研究した言語にはアイスランド語、ヒンディ・ウルドゥ語、ヨーロッパポルトガル語、日本語などが含まれますが、詳細に分析していくと表面的に観察しただけでは見えてこない共通点が浮かび上がってきます。理論言語学では、そのような共通点が単なる偶然によるのではなく、使用者である人間の認知能力を反映したものであると考え、その仮説を検証します。

さらに私の専門としている理論はコンピュータによる自然言語処理にも広く応用されており、その1つにパラレル文法プロジェクトというものがあります。ある意味内容が、言語間で表層的には異なった形式で表されるにも関わらず、文法機能の表示において極めて近似的な構造へと対応付けられることで、言語間の機械翻訳などを可能にするという国際的研究プロジェクトです。また、現在キーワードによって行われているウェブ検索ではなく、我々が普段使うような質問形式で問いかけることで、その質問の文法構造、意味内容を解析し、対応する答えをウェブから探してくるといったことも可能にしてくれます。日本語に関しては、富士ゼロックスの研究チームがシステムの構築を行っており、現在そのチームと定期的に打ち合わせを重ねながら、連携の可能性を探っています。

澤 田 敬 司

1) ポストコロニアル演劇研究：日本、オーストラリア、ニュージーランド、カナダなどの先住民によるパフォーマンスを比較検討しながら、演劇のポストコロニアリズムについての研究を行っています。

2) 演劇の実践的研究：翻訳者・ドラマトゥルクという演劇実践者の役割を果たしながら、関わっている各公演について研究者としての分析・検討を行っています。最近の仕事としては……

○1950年代の英国の核実験によって被曝・離散した先住民の運命を描いたオーストラリア先住民演劇『ナパジ・ナパジ』を、ユネスコ国際演劇協会・日本センターにおいて翻訳上演しました。

○日本人移民と先住民、アジア・太平洋諸民族の交流を描いたジョン・ロメルリル作『ミス・タナカ』を、演劇博物館グローバル COE とオーストラリア学会の共催により翻訳上演し、文化人類学、文学、演劇実践者の視点から検討するシンポジウムを開催しました。本作品は2012年に、約380年の伝統を誇る江戸あやつり人形劇団「結城座」により東京芸術劇場で上演され、その後、海外の国際芸術祭参加も検討されています。

3) 翻訳理論研究：舞台翻訳の実践経験を土台に、演劇における翻訳理論の確立を目指しています。日本では国際日本文化研究センター、海外ではモナッシュ大学などで研究成果を発表しています。

4) 映像文化論：オーストラリア先住民映画の歴史的展開についての論考が、世界思想社刊行の論集に収められることになっています。また、日本で公開されるオーストラリア映画への解説を劇場用パンフレット等に寄稿しています（2012年公開『アニマル・キングダム』、『ハンター』等）

5) オーストラリア現代文学の紹介：オーストラリア現代文学を代表する小説家ティム・ウィントンの長編小説の翻訳を進めています。

下 田 啓

法学部では英語科目を担当していますが、専門は日本近現代史です。現在にいたる研究を一言で片付けてしまえば地方史で、近世から戦前までの会津地方を対象としています。研究テーマは近代国民国家に於ける「郷土」と「国」といった二つの共同体への帰属意識をめぐる葛藤で、identity と periphery がキーワードになっています。日本ではアイデンティティーに関する諸問題はあまり取り上げられませんが、私が長年暮らし、教育を受け、仕事をしてきた米国では日常的な問題です。三十年間近く「日本人」と「アメリカ人」の狭間でマイノリティーとして生活してきたことによって、辺境からの視点、境界といった空間やアイデンティティーの形成に対して問題意識を持つようになったのかもしれませんが。以上の研究が一段落したので、最近では戦後史に目を移し、現代のメディアが映す戦後昭和期に関する研究を進めています。バブル期以降の日本が如何に高度成長期を脱工業化社会的な「神話」として捉えているか考察しています。

歴史といえば、膨大な量の人名や地名や年月日を暗記させられ苦い思いをした学生も少なくないでしょうが、歴史学の真髄とは史料の解釈をめぐる論争です。つまり、論拠となる知識とテキストを巧みに駆使した主張が「歴史」として世に残るのです。その点では歴史学と法学が重なる点は多いのではないのでしょうか（実際に、米国のロー・スクールでは学部時代に歴史を専攻した学生が少なからずいます）。早稲田法学部でも、専門と一般教養を上手く繋げてみてはいかがですか。

首 藤 佐智子

私の研究は二つの研究分野に属している。まず一つは語用論という研究分野における理論的研究である。これは90年代に米国のジョージタウン大学言語学科の博士課程で始めた研究で、98年には言語学の博士号を取得した。語用論とは、文脈や話し手の意図という観点を考慮した上で、言語表現が意味を伝達する仕組みを解明しようという研究分野である。私が特に関心をもっているのは、言語学における「前提」という概念である。2002年に Routledge 社から出版された博士論文では、日本語の「も」の前提条件とその談話機能の関係を研究対象としたが、現在は前提条件と談話機能の関係に関してより普遍的な理論を構築することを目指している。

もう一つの研究対象は司法コンテキストにおける言語の問題である。このような研究は「法と言語」という研究領域に属す。日本で「法と言語」という領域が学問分野として認められるようになったのは近年のことである。言語学の理論や研究成果が司法の場において活用されていないことを齒がゆく感じていた私は数人の研究仲間と共に8年ほど前に研究会を立ち上げたのだが、裁判員制度の導入で、司法の場におけるコミュニケーションに対する関心は急速に高まり、それに追隨する形で法と言語全般に対する関心も高まってきたのは喜ばしいことである。

鈴木 理恵子

私は19世紀英文学を研究しています。19世紀前半のイギリスは、変動に富んだ時代でした。フランス革命の余波を受けて、より民主的な社会を築こうとした半面、反動政治が横行し、革新的な内容の出版物の押収や、集会の弾圧が行なわれました。自由と平等を求めて、詩人達は詩作活動に励んだのでした。その中でもとりわけ社会問題を真っ向から取り上げようとしたのが、パーシー・ビッシュ・シェリー（1792～1822）でした。フランス革命が失敗に終わった事を反省する意味で執筆された、『イスラムの反乱』（1818）、労働者達に向けられて執筆された、『無政府の仮面劇』（1819）、エリート層の教育を意図した、『鎖を解かれたプロメテウス』（1820）など様々な読者層を想定して詩を書きました。大方これらの詩作品は思ったような読者層を獲得することがなく終わってしまいましたが、後々ごく限られた人々に多大なる影響を与えました。例えば、『無政府の仮面劇』はチャーティスト運動における必読書となりましたし、20世紀のマルクス主義にも影響を与えました。個人で影響を受けた詩人の中にロバート・ブラウニング（1812～1889）がいました。彼は20歳シェリーより若く、丁度10歳の時にシェリーがイタリアで溺死してしまうので、直接会うことはありませんでした。青年期にシェリーの詩を発見し、手に入るものを全て集め、シェリーの詩の世界に傾倒したのでした。一時は、無神論者になり、菜食主義者にまでなったといえます。ブラウニングにとって、シェリーが弱者の味方であったことが一番印象的であったようです。ブラウニングはシェリーを模倣する形で詩作活動を始めますが、徐々にシェリーからは離れていき、独自の作風を築き上げていきます。私は、シェリーの影響がもはや見られなくなったといわれる作品にもシェリーの影響を見出そうとしています。つまり、真なる影響とは単発的なものではなく、末永く見られるというのが持論です。ブラウニングの初期の作品に限らず、晩期のもので幅広く作品を取り上げています。

武 黒 麻紀子

「言語人類学」について知っている方は少ないでしょう。言語学と人類学の2分野を跨ぐ言語人類学は、言語を社会文化そして歴史的視座から体系的かつ包括的に取り扱い、究極的に全体（宇宙）へと向かっていく学問分野です。19世紀ドイツの大思想家フンボルトの影響を受け、後にアメリカでの人類学の礎を築いたボアスや弟子の言語人類学者たちが目指したのも、領域横断的で多角的なアプローチを通じて文化社会と自然の相互のありさま全体を記述・分析することでした。この全体性への志向こそ言語人類学が誇る学問的伝統であり、それがパース記号論と結びついて、すべてのものを相互関係のもとでとらえ、その相互関係を動的に考える学として発展しつつあります。

言語、社会、文化、権力といった統計や科学実験では扱えない事象を分析対象とする場合、どうしたら分析的緻密さを保ちつつ、マクロとミクロな世界の両者を視野に入れて研究ができるか、この疑問に答えてくれるのがパースによる記号分類のうち『指標』の概念です。満員電車で後ろに立つ顔の見えない2人の会話を聞いてどちらが上司で部下か分かるのも、日本語の小説の会話文の連続を読んで性別が予想できるのも、女性が「オレ」と言ったら1人称としての自分を指し示すだけでなく「私・あたし」や「ウチ」とは明らかに違う社会文化的意味を瞬時に理解するのも、言語のもつ指標性にほかなりません。「今・ここ」における言語使用のミクロな側面が、それを取り囲む社会文化や歴史という大きな流れと結びつき、言語と文化の本質的なつながりへとたどり着く可能性はここにあるのです。

最近、私は時間を見つけては沖縄県石垣島に赴きフィールドワークを行っています。石垣島で使われる空間言語表現とジェスチャーを調べるうちに、空間表現は伝達目的を超えて島民や移住者のアイデンティティと関わること、空間認知が人間関係を軸に動的に創発されることが分かってきました。言語と文化の相互作用を探る研究の奥深くに広がる世界に挑戦中です。

立 花 英 裕

学部の卒論にロートレアモンを選び、フランス以外の土地に生まれ、少年時代にフランスにやってきた詩人が私の研究の出発点になった。ロートレアモンは本名がイジドル・デュカス。両親はフランス人だが、南米ウルグアイに生まれている。この選択が、その後の研究に少なからず影響をあたえているようにみえる。特に、フランスに長く滞在し、そこで文学的な出発を果たしたフリオ・コルタサルやバルガス＝リョサのようなラテンアメリカの作家や、チェコからフランスにきたミラン・クンドラのような作家に関心をいだき、1990年代にずいぶん論文や記事を書いた。

一つの転機になったのは、カリブ海フランス語圏文学やケベック文学の発見である。1990年代前半から、クレオール作家、特にマルチニック島のエドゥアール・グリッサンやハイチの作家をよく読むようになった。2011年は、ハイチ出身のカナダ・モントリオール在住作家ダニー・ラフェリエールの『ハイチ震災日記』を翻訳出版できた。今後も、この作家に取り組んでいくつもりである。また、ほぼ同時にネグリチュードの詩人エメ・セゼールの対談集を翻訳出版した。対談の相手は、フランス・ポストコロニアル研究の第一人者フランソワーズ・ヴェルジェスである。ヴェルジェスの後記は対談と同じくらい長く、ポストコロニアル研究の教科書にもなりうる充実した内容となっている。

他方、ここ10年くらい、比較的大きな本の翻訳に専念してきた。ジェラルド・ブシャール『ケベックの生成と「新世界」』、ミシェル・ヴィノック『知識人の時代』など。前者は、第一次産業革命以前に入植が進んだ植民地が独立するにあたってどのような国民意識や文化を形成するに至ったかを論じる浩瀚な書物である。個人訳でもう一冊社会学関係の大著の翻訳に長年取り組んできた。ピエール・ブルデュー『国家貴族』（藤原書店）だが、こうした翻訳の仕事は社会科学的な視点から文学を見る目を開かせてくれた。

谷 昌 親

マイナーの彼方へ

気がつくと、いつのまにかマージナルなもの、マイナーなものに惹かれて
いる自分がある。本来の専門は、フランス現代文学、とりわけダダ・シュル
レアリスムの周辺であり、これらの前衛運動そのものは、必ずしもマージナ
ルではないが、フランス文学の王道といったものから見れば、やはりその余
白にこそ生まれてきたものだろう。しかも、ダダ・シュルレアリスム関係で
も、その中心にいたブルトンより、周辺的存在へと眼が行きがちだ。その結
果、ブルトンと袂を分かったミシェル・レリスやロジェ＝ジルベール・ルコ
ントに興味をいだき、ダダの先駆者とされるレーモン・ルーセルやアルチュ
ール・クラヴァンに魅せられたりすることになった。

この種の性癖は、もうひとつの専門分野である映像論においても出てきて
しまい、もちろんヒッチコックやホークスは大好きだが、同時に、翳を宿し
たフリッツ・ラングやニコラス・レイに磁力を感じてしまう。この二人のフ
ィルモグラフィーにおいて特徴的なのは、フィルム・ノワール的な作品の存
在であり、フィルム・ノワールこそ映画史の余白に生まれてきたジャンルだ。
そして、やはり関心をもって眺めつづけているフランスのヌーヴェル・ヴァ
ーグが、フィルム・ノワールを特徴づけている B 級映画的なあり方を引き
継いでいるのは、たとえばゴダールの作品を見ればあきらかだ。

それにしても、なぜマイナーなものに惹かれるのか。おそらくそれは、ジ
ル・ドゥルーズに倣えば音楽においてマイナー・モードが「つねに不均衡に
あるダイナミックな結合」を生み出すのと同じで、異質な要素を刻み込み、
自分自身を一種の異邦人とさせてしまう「マイナー化」に、蠱惑的とでも形
容したくなる可能性を感じてしまうからなのだろう。

関係書籍等——『詩人とボクサー』、『ロジェ・ジルベール＝ルコント』、『オランピ
アの頭のリボン』（翻訳）、『ゴダールに気をつけろ』（分担執筆）

塚 原 史

学生諸君へ：この雑誌が想定している主な読者は法学部の学生諸君なので、この場を借りて、学生時代から現在までの私の研究教育者としての略歴をごく手みじかに述べておこう。私は本学政治経済学部政治学科を大学紛争渦中の1971年に卒業したが、日本の大学の多くの法学部では政治学科は法学部に含まれるので、法学部生と大差ない専門科目（民法、商法関係以外）を履修したことになる。学部時代には政治学の内田満先生、フランス語の秋山澄夫先生、窪田般彌先生（文学部）の教えを受けた。卒業後は秋山先生の授業で出会ったダダの創始者 Tristan Tzara の反文学反芸術の思想に惹かれてフランス文学・アヴァンギャルド芸術研究を志して京都大学大学院に進み、修士修了後フランス政府給費留学生としてパリ第3大学博士課程に登録し、ツァラやブルトンら20世紀フランスの先端的詩人を読み耽ったが、同時に、当時パリ留学中だった社会思想の今村仁司先生の勧めで現代思想の名著 Jean Baudrillard, *La Société de consommation* の邦訳を手がけることになった（法学部名誉教授・元早大総長の奥島孝康先生とも今村先生の紹介でパリでお会いしている）。ボードリヤールは2003年来日、私が世話役となって早稲田講演をお願いした。上記記書は1979年に出版され今日まで版を重ねているが、この本が出た年に法学部の教員となり、以来数十年フランス語や芸術論などの授業を担当しているわけである。最近では、早大會津八一記念博物館館長を兼務している。8号館の隣の2号館がミュージアムなので、学生諸君もぜひ訪れてほしい（2014年5月に「荒川修作の軌跡」展を開催）。

最後に、私の著書から接近し易そうなものを少しだけあげておこう。

著書：『ダダ・シュルレアリスムの時代』・『20世紀思想を読み解く』（ちくま学芸文庫）、『ボードリヤールという生きかた』・『荒川修作の軌跡と奇跡』（NTT出版）、『反逆する美学』・『切断する美学』・『模索する美学』（論創社）、『アヴァンギャルドの時代』（未来社）。

土 谷 彰 男

中国文学のうち、これまで唐代詩文を中心とした古典文学研究を行ってきた。とくに、中唐期の詩人である韋応物（727?-791）を中心として、論文を書いている。

韋応物についてはこれまで、「王（王維）孟（孟浩然）韋（韋応物）柳（柳宗元）」と並称されるひとりとして、山水描写を得意とする自然詩人であると見られてきた。また、陶淵明を敬慕してやまなかった詩人として、彼は田園風景の描写に優れるのみならず、その処世も陶淵明に倣うものとされてきた。

一方で、盛唐を継ぐ中唐は、安史の乱（755～763年）の戦禍を契機として、それまでの貴族社会を中心とした中古から、官僚政治を主体とする近世へと至る時代の転換点にあたるなか、彼はその青年期の文学形成において如上の社会事情が大きく影響したこと、また彼はその晩年に「韋蘇州」と呼ばれたように、地方官僚として優れた治績を上げたと同時に、その時代を象徴する文学を築いた文学者としてあること、そこに新しい文人像の出現を見るのである。

蘇州という地域は江南とも呼ばれ、魏晉南北朝時代より歴史文化の蓄積浅からぬ地であって、韋蘇州がこの土地において独自の文学を築きあげたことは研究に値しよう。なぜなら、大暦十才子の活動に見られるように、当時は朝廷における種々の文学活動が一定の規範となって強い影響力を持っていたからである。のちの中唐期を代表とする白居易や劉禹錫といった文学者は、この蘇州時代の韋応物から少なからぬ影響を受けているのである。

韋応物とその作品が、当時であって如何なる意味を持っていたのか、また、後代に如何なる影響を及ぼしたのか、それらを見極めながら、今後も研究に取り組んでいきたい。

原 田 康 也

大学に入ったときは理科系でしたが、卒業したのは教育学部学校教育学科でした。『教育とメタファーとしての言語』という題目の卒業論文では、I. A. Richards の比喩研究と数学の準同型の概念を参照しながら、連立方程式の解法の中学生にとってわかりやすい説明の仕方について検討しました。算数の文章題を代数式で表現して計算した結果が元の文章題で求める答えと一致すること、代入法・加減法・図解などさまざまな方法による計算が同じ答えを導くことが不思議でしたが、式をどのように計算しても、途中で処理する計算も求める値にも変わりがなかったことが少しだけ理解できました。（この経験は、数年後にモンタギュ文法に触れたとき、その本質を理解する上で役に立ちました）大学院では英語英文学という専門課程に所属して、言語と意味の関係をわきに置いて、統語論を中心に文法理論についての研究を進めました。が、修士論文を書き始めたころから、モンタギュ文法を通じて意味の研究に興味に戻り、コンピュータサイエンス研究者と共同して日本語文法の研究を進めるようになりました。1991年3月から1993年3月までスタンフォード大学言語情報研究センターでさまざまな分野の人たちと交流して早稲田大学に戻って研究に専念し始めた1994年に前任者から突然指名されて早稲田大学の情報化に関わることとなり、インターネット・マルチメディアを教育と学習にどのように活用するかについて研究するようになりました。高校生のころに言語学と電気工学に興味を持った理由の一つは、英語をどのように勉強するのが合理的か、英語の練習のためにはどのようなテープレコーダを買うのがよいのかを理解しなかったからですが、新しい世紀を迎えるころにはそんなことをすっかり忘れていました。2001年3月から2002年3月までの一年間をシリコンバレーで過ごしているうちに、そんなことを思い出して、いまでは言語学・認知科学・言語処理・音声処理の研究成果を日本人の英語学習の合理化に活用する方策を研究の中心的な課題としています。

星 井 牧 子

専門分野は「外国語教育学」で、「ドイツ語教育研究」がその中心です。「ドイツ語教育研究」と言うと、「教授法ですね」とよく言われます。たしかに教授法も外国語教育学の一部ですが、外国語教育学の扱う領域はもっと広く、応用言語学の一領域として、言語習得・言語学習に関わるすべてを、さまざまな切り口から扱い、社会学や心理学とも関わる学際的な研究分野です。

なかでも私が関心を持っているのは、1) 学習者言語の特徴と習得プロセス、2) 学習環境と言語学習、3) 多人数コミュニケーション場面における言語使用と言語学習の3点です。1) の学習者言語については、日本語を母語とするドイツ語学習者のドイツ語使用に見られる特徴が焦点となっています。他の母語話者をめぐる研究成果も踏まえて、たとえば語順や冠詞の使用など、いわゆる文法的な側面について、L2(第二言語)のインプット、L1(母語)の影響などから調査します。2) の学習環境と言語学習については、日本でのドイツ語学習のように、授業外で学習対象言語を使用する機会がきわめて限られている学習環境の中で、授業形態を変えたり、テレビ会議を利用して日独の教室を結び、目標言語のインプット／アウトプットの機会を増やすことで、言語学習がどのように変わるか、言語使用・動機づけの両側面から調査します。3) については、学習者がドイツ語母語話者を含む多人数コミュニケーション場面で、どのようなコミュニケーション・ストラテジーを使用し、どのように発話を構築しているかという観点から分析します。これらはいずれも学習者の発話や授業内のインタラクション、さらにはインタビューなどのデータをとって、実証的な手法による分析を行っています。

外国語学習は文法と単語を勉強すればよいと思われがちですが、実際は目標言語と母語・学習環境・学習者要因、あるいは社会的環境が複雑に絡み合った複合的なプロセスです。あくまでも言語学習の現場を出発点にして、「外国語を学ぶ」という複合的なプロセスに、光を当てたいと考えています。

本 山 哲 人

シェイクスピア作品の起源を大衆文化のなかに見出した Robert Weimann の *Shakespeare and the Popular Stage* を出発点として、大衆文化とエリザベス朝演劇作品の関係性をいくつかの角度から検討してきた。

まずは、戯曲の組み立て方に関する考察である。エリザベス朝劇作品の構成において当時の観客の存在が重要な役割を果たしたのではないか。これを念頭において、観客反応を引き出しやすい歴史的、社会的話題がどのようにして組み立てられて作品の構造をなしているのかを探ってきた。このような視点で、シェイクスピア、マーロウ、ピールといった作家を比較検討し、最終的には『タイタス・アンドロニカス』のような共同執筆作品をどのようにして考えたらよいかを探ってきた。

最近では、視点を現代に移し、文学教育や作品の映像化など、エリザベス朝劇作品の受容に目を向けている。文学教育は政治的な政策と批評理論に翻弄され、実利的な意義を示すことが重要とされてきているが、その問題点を、現代のシェイクスピア版本の特色を通して考えてきた。その一方で、教育理念などは打ち出さず、シェイクスピア愛好家と舞台関係者によって作り上げられた中高生のシェイクスピア上演祭を調査することで、市民レベルでエリザベス朝戯曲が受容され、受け継がれていくことの可能性も考察している。

作品の映像化に関しては、Trevor Nunn という、古典演劇と大衆演劇、どちらも手掛けてきた演出家のテレビ版シェイクスピアを検討してきた。Nunn 作品は大衆文化の要素を取り入れることによって、戯曲の特徴とされながらも上演する際には表現しにくい側面を観客に伝えることに成功している。今後は、イギリスの実験的な映像作家 Derek Jarman がファッション広告のような映像で作り上げた *Angelic Conversations*、パンクやキャバレーのアイコンを役者として起用した *The Tempest*、そして原文を打ち消すようにして台詞を書き加えた *Edward II* を取り上げようと思っている。

守 中 高 明

2001年「9・11」事件以後、そして2011年「3・11」大震災以後、人文学の知が厳しい試練に晒されているのは誰もが実感していることだろう。あのテロリズムをきっかけとしてアメリカ合衆国が作り出した国際法上の「例外状態」(シュミット)とその中で発動させた「神話的暴力」(ベンヤミン)の結果、今日まさに「世界内戦状態」と言うべき状況が生まれている。現在の「イスラム国」をめぐる危険な抗争のそもそもの原因が合衆国のアフガニスタンへの「報復戦争」とイラクへの軍事侵攻にあることは忘れられてはならない。他方、東日本大震災に起因する東京電力福島第一原子力発電所の過酷事故は、技術的収束の見通しがまったく立っておらず、その解決のためには数十年どころか数百年・数千年単位の時間を要するとすら言われており、原子力発電が制御不能な怪物であることが露呈した。にもかかわらず、現政権は原発の再稼働を実行しようとし、原発技術の海外への輸出さえも計画・推進している。また、現政権は去る7月1日、日本が戦後69年間まがりなりにも平和を維持することを可能にしてきた憲法、とりわけその第9条を実質的に空文化する閣議決定を強行したが、これは行政機関の暴走であり、現在この国では立法機関も司法機関もその「決定」を追認するだけ、すなわち端的に三権分立が機能不全を起こしていることを意味する。

これらの事実を想起するだけで、現在がいかに深い危機の時代であるかが確認される。この現実を前にして、人文学者は何をすべきか。狭いフィールドに自足し制度に保証された「学術研究」を再生産するだけの「専門家」とどまることは、今や倫理的に許されない。たとえばチョムスキー、サイード、デリダ——彼らはおよそ最も厳密な理論を練りあげる一方、その知に基づいて決然と状況へ介入した。知識人とはそのような行為が可能な主体を指す。私もまた彼らを模範として(痩せても枯れても)一人の知識人でありたいと思う。時代は行動を求めている。アクション、ただアクションあるのみ！

門 田 康 宏

古來東アジアでは、士大夫階級のみが読み書きできる共通文章語として漢文が用ゐられてゐた。この高位言語の流通が現在の中國領土を越えてかなり廣範圍に及んでゐたのは、吉備眞備や阿倍仲麻呂が長安にわたつて高級官僚として活躍し得たことから理解できやう。

西晉時代に編纂された史書《三國志》は純正文語だつたため誰もが讀解できたわけではなく、それを素材とした説話の話本《三國志平話》が宋代に流布し、さらに元代には《全相平話三國志》が刊行され民衆の間に廣まり、やがて明代の通俗歴史小説《三國志演義》の出版へと發展していつた。

かやうに、書き言葉と話し言葉は長らく乖離したまま併存してきたが、その二極状態を解消し、平明なコトバで文章を書くことが提唱されたのは中華民國初期であつた。實際には清末からその胎動はあつたのだが、辛亥革命によつて清朝が倒れたのち、國民國家への轉換を推進する當時の改革派知識人たちは白話文學を提唱し、言文一致による文語と口語の融合が進むなかで中國の近代文學は生まれた。

大衆の言葉から個の言葉へ、うたから詩へ、ものがたりから小説へ——。社會の近代化に伴ひ言語と表現の相關性にどんな變化がもたらされたのか、そこに興味をもちながら民國期の文學作品を讀んでゐる。韻文であれ散文であれ、文脈を掘り込むことで作者の發意を見極めることができるのではないかとこの着想を得て、表象的な言葉から異國人の發想にいたる問題に取り組んでゐるが、その手がかりとして日本の近代文學の成立にも關心をもつてゐる。

漢字といふ文字文化を共有する兩國であるが、國情はもとよりそもそも漢語と和語は異なる起源と特質をもつ言語であつたため、近代化の過程でいかなる文章表現を獲得していつたのか、それはもちろん一様ではないが、その近似性と差異を考察するのは非常に興味深い。それは翻つて、漢字語のなかで生きる自分自身のコトバを問ひ直す道程ではないかと思つてゐる。

弓 削 尚 子

アグノトロジーという概念があります。『健康帝国ナチス』や『がんをつくる社会』の著者として日本でも知られているアメリカの科学史家ロバート・N・プロクターによってつくられました。簡潔に定義すると、「ある文化的文脈の中で抹殺されることになった知識の探究」といえるでしょう。人類の歴史において知識が増大し、拡大してゆく過程はこれまで注目されてきました。ですが、この過程と同時に、膨大な「無知」もまた、それぞれの文化や社会、時代における一定の価値観のもとで創造されてきました。プロクターは、20世紀後半のアメリカ社会において、巨大なたばこ産業の利益のために、喫煙の発ガン性リスクを指摘する科学研究やその知識が抑圧され、政府もまたそれに加担してきたという事実を暴きました。

ナショナル・ヒストリーを重視し、歴史の勝者であった西洋を中心に、男性が支配した公的領域にもっぱら目を向けた近代歴史学もまた、多くの無知を創造してきました。やや大仰に表現すれば、私の研究は、このような歴史学におけるアグノトロジーを実践することにあります。これまで、たとえば近代の大学制度が始まる以前に「例外的に」博士号を取得した、いわゆる「学ある女たち」や、近世の宮廷文化に欠かすことのできなかったカストラート（去勢歌手）に注目してきました。現在、関心をもっているテーマは、啓蒙主義の時代に芽生えた「人種学」の成果が、「金髪碧眼」の白人ヨーロッパの優位を説明するために歪曲されていったという問題です。

このような研究は、メインストリームの歴史に埋もれた事象を掘り起こすだけにとどまりません。なぜ従来の歴史家が着目してこなかったのか、そこにはどのような価値観があったのか、どのような権力の磁場がはたらいてそのような無知が創造されたのかについて考えていかなければなりません。困難な作業ではありますが、歴史学全体の社会的意義を踏まえれば、大変スリリングにして魅力的な作業でもあります。

吉 田 裕

本は小さい時から好きでしたが、詩や小説の面白さに目覚めたのは、中学時代でした。乱読の時期を経て、大学は文学部に入ることに迷いはありませんでした。専門を決める時、日本文学とフランス文学の間で迷ったのですが、日本文学は自分でやれるだろうと考え（実際にはそんなに甘くはありませんでした）、19世紀から20世紀にかけての作家たちの魅力でフランス文学を選び、なんとなくそちらの方に時間をとらせるようになりましたが、気持ちの上では、半分は常に日本文学の上にあります。詩と批評が好きで、ランボー、ボードレール、ブランショ、啄木、一葉、小林秀雄、江藤淳、吉本隆明などという人を読んできました。とりわけ日本については、近代社会の中で文学や思想をやるとはどんなことだろう、というのが変わらぬ疑問です。

どっちつかずのこの立場から、現在複数の関心事があります。一つはフランスの作家・思想家であるバタイユに対する関心です。彼は文学や造型芸術、宗教、政治、社会学など多方面の著作があります。それらを総括する作業に取りかかっています。二つ目は、現在の文学や芸術を、空間の輻輳という観点から捉えてみたい、という関心です。空間が単一で等質であるという性格を失い、各所で重複しぶつかり合っているのではないか、という印象があり、この関心から出来る限り多くの作家や画家を検討することを試んでいます。大学での講義「文学論」はこれを主題とし、バタイユ、マネ、セザンヌ、ルーセル、カフカ、リンチ、吉本隆明、後藤明生、古井由吉、吉増剛造、村上春樹、多和田葉子、等を取り上げています。三つ目は、小林秀雄論を書くことです。この批評家から自分というものをどのように考えるかについて学びました。今は、この問題が伝統とか歴史とかに結びついていくところに興味を持っていて、宣長論という最後の部分に取りかかる準備をしているところです。目の前の一步を踏み出すことでしか進まないのだな、というのが、研究というものについての印象です。

ゲイ・ローリー

「歴史の浅い国」オーストラリアに生まれ育ったせいか、私が生涯の研究テーマとしているのは「人」と人が生まれ育った文化の「過去」との関係です。拙著 *Yosano Akiko and The Tale of Genji* (2000年) では、著名な人物である与謝野晶子と名著『源氏物語』の関係について書いてみました。多くの人にとって晶子は「情熱の女流歌人」や「新しい女」として知られています。しかしながら、『源氏物語』の愛読者晶子もいます。『源氏物語』は晶子が成し遂げた仕事だけではなく、生き方にまで深い影響を及ぼしたのです。

それほどまでに『源氏』を愛読し、影響された女性是他にいるのだろうかと思い、研究を進めたところ、実にたくさんいることがわかりました。この頃興味があるのは近衛家に生まれた^{か おくぎょくえい}花屋 玉栄 (1526-1602?) で、女性のための『源氏物語』注釈書『花屋抄』と『玉栄集』を書いた一人です。また、中院仲子 (1591?-1671) という後陽成天皇の^{ごんないしのすけ}権 典 侍は猪熊事件に巻き込まれた後『源氏物語』関係の歌集などを流罪先に持って行きました。ほかに、^{お お き まち}正親町町子 (1679-1724) という柳沢吉保の側室は、吉保の伝記とでも言うべき『松陰日記』を書いたときに、『源氏物語』が重要なモデルとなりました。玉栄と町子を含む公家女性の『源氏物語』読者についての論文は編著 *The Female as Subject: Reading and Writing in Early Modern Japan* (2010年) にて発表しました。

他に、「結婚外」で一生を過ごした女性にも興味があります。古くは天皇の^{ないし}内侍、権力者の側室、あるいは尼として生涯を終えた女性がたくさん存在し、近代になってからは芸者や娼婦がいます。諏訪温泉で働いていた故増田小夜さんは自叙伝『芸者』(平凡社、1957初出)の英訳を快く許し *Autobiography of a Geisha* として2003年に出版しました。

法学部の授業において少しでも多く女性の経験・視点を入れて皆さんと一緒に勉強していきたいと思います。